

とんとむかしがあつたてんが

むかし、あるところに、若い男が住んでいました。働いても働いても暮らしが楽にならず、やがて、毎日のご飯にも困るようになりました。

若者は、村の鎮守さまに、

「どうか暮らしが楽になりますように」と、願掛けをしました。

三、七、二十一日、お参りをして、二十一日目の満願の晩に、祈りながら、とろとろと寝入ってしまいました。すると、夢かうつつか、鎮守さまが枕もとにずうつと現れて、「おまえは、生まれてくるときに、今の福さえもらわないうで生まれてきたのだ。けれど、せつかくこうして頼むんだから、しかたがない、しやもじを一本だけやろう。このしやもじの表のほうで人の尻をなでると、トンプツリ、トンプック、ボツカイボツカイ、トンプツリ、と音を出す。そして、裏のほうでなでると、音がとまる」といいました。

若者が、ひよこつと目をさますと、そこに妙なしやもじが一本置いてありました。「しやもじなんてもらったってしかたがない」と思いましたが、「神さまのお告げだし、まあそれでも持つて出かけよう」と、しやもじをふところに入れて、町へ行きました。歩いてみると、お城のお姫さまの行列に出会いました。お姫さまは、花見に行くところでした。若者は、「これだ」と思って、さつきさずかつたしやもじを取り出しました。そして、何も知らないで歩いてお姫さまのお尻を、しやもじでこつそりなでてみました。そのとたん、お姫さまのお尻が、トンプツリ、トンプック、ボツカイボツカイ、トンプツリと鳴りだしました。

お姫さまは、恥ずかしがるし、お供の人たちは大騒ぎしましたが、音はどうしても鳴りやみません。とうとう、お姫さまは、花見をやめてお城へ帰ってしまいました。

お姫さまは、だれにも会わないで、部屋にこもって、泣いてばかりいました。お医者に見せてもいっこうによくならないので、お殿さまは、町々におふれを出しました。

娘の病気を治してくれる者があれば、どんな願いでもかなえてやる

若者は、また、「これだ」と思って、お城へ行きました。そして、

「わたしが、お姫さまの病気を治してごらんにいます」と、名乗り出ました。けれど、あんまり来ているものがぼろなので、殿さまも信じられませんでした。それでも、

「ものは試^{ため}しだ」と、やらせてみることにしました。

若者は、お姫さまの部屋に入ると、一生懸命^{けんめい}お祈りをするまねをしました。そして、「これで、もう、治ります」といいながら、こっそり、しゃもじの裏で、お姫さまのお尻をなでました。たちまち、お尻はばたと鳴りやみました。

お殿さまはたいそうよここんで、

「何でも好き^すなものをやる」といって、さまざま^{たかもの}な宝物をくれました。

若者が宝物を持って帰ろうとすると、お姫さまが、

「こんな病気を治してくださいだんだから、わたしは、この人といっしょになります」といいました。若者は、お姫さまと結婚^{けっこん}して、一生安楽^{あんらく}に暮らしましたとき。

いちごんさかえた　ぶらりとさがった

ぼっかい…越後^{えちご}の土地言葉で、大きなしゃもじのこと。

村上郁再話

資料『昔話研究昭和10年1月号』『新潟中蒲原郡昔話』小林存／三元社